

---

。 鈍。

央 8 4

---

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

。鈍。

### 【Zコード】

Z9491R

### 【作者名】

央84

### 【あらすじ】

あるところに「守城かみしろ」といつ家がございました。

その家に生まれた子は、成人になると剣士にならなければいけません。

剣士になることをひたすら拒む?花と、その家族とのお話。

## 登場人物（前書き）

ネタばれあり。

11月31日更新

## 登場人物

主人公・守城もりじゆうじゅう？花

次女／3年4組

反抗期真つ盛りW

引きこもり（更生するには参刀）。  
家の掟と兄の錆皇が嫌い。

守城家

長男・錆皇じゅうおう

25歳

堅苦しく、真面目な性格。

重度のシスコン。

次男・？かなと

20歳

錆と二卵生の双子。  
女装壁がある。

おつとりとした、柔軟な性格。

三男・錆いかり

?と二卵生の双子。  
ドがつくほどの中。  
?と一緒に別居中。

長女・？

18歳

超がつくほど頭がいい。

表向きは学者として、大学で働いている。

学校

教員

理事長・白谷藍季

25歳／男

優しく、紳士（？）。

錆皇とは、腐れ縁で犬猿の仲。

家族ぐるみで、守城家と仲がいい。

保険医・字神紫煙

25歳／男

元・不良。

錆皇とは親友であり、

藍季と錆皇の喧嘩が止められる唯一の人物。

教師・太刀渡安曇

25歳／女／1年医療学担当

テンションが無駄に高い帰国子女教師。

英語交じりで話す。

生徒  
錐崎仁也

3年4組／男

俳優もこなす、アイドル。

成績はとてもよく、常に学年トップ維持。

水谷夕暮

3年1組／男

女っぽい外見をもつ、男。

面白がって、女装&女口調で話している。  
毎回学年1位の学力があり、IQは200くらい。

### ♪バトルシップ編（拾壹刀♪）♪

盾野・威早・福生

頭脳優秀な3人。

銃での戦闘を得意とし、接近戦が最も苦手。

索道匂雪

3年1組／男

【死の卓上（DEATHBOARD）】を使う能力者。

成績がいい、優男。

アドウッド・ハモン

3年1組／男

【吸収生物】の能力者。

混合成物を手懐ている、イギリス人。  
噂では黒魔術なども行っているらしい。

神？八紘

3年2組／女

【親身一体】の能力者。

金髪の球関節人形、ルウェイ・ツールをいつも持っている腹話術師。

雑刀での攻撃を主として戦う。

死野絶

3年／男

## 【跪器具】の能力者。

単純で、人に依存心が高い。

絶望の数々を小さいころから乗り越えてきたらしく、他人に見下されるのが嫌い。

### 希屋無声

3年 / 男

【死者の手】<sup>アンデッドハンド</sup>の能力者。

チームの死野・愛尾とは仲が良く、いつも一緒にいる。チームの精神的要といえる人物。

### 愛尾不理

3年 / 女

バッサリとした女の子。

他人に言うことは言う、そんな性格。

### 初終音

3年 / 女

アルビ

色素欠乏症のため、肌が薄桃色で目が赤く髪も白い。日光に弱く、UVケアが大変。

欠点を無くせば最強と言われる剣士。努力する天才。

### 桃刀智

3年 / 男

薄い茶髪のチャラい男。剣士。

単純な男で、誰とでもすぐに仲良く出来る人。

### 和泉来

3年 / 女

夕暮と1、2を争う銃士。<sup>ガンマン</sup>

口数が少ない。

夕暮からは好意を持つて接しているが、本人はあまり夕暮が好きではない。

## 能力説明（前書き）

作品中に出てくる能力を説明します。  
ネタばれ注意。

## 能力説明

【七大罪】 使用者：守城？花  
七つの大罪、【色欲】<sup>ラスト</sup> 【怠惰】<sup>スロウズ</sup> 【強欲】<sup>グリード</sup> 【嫉妒】<sup>エングイー</sup> 【憤怒】<sup>ラース</sup> 【傲慢】<sup>プライド</sup>  
【暴食】<sup>グラトーテ</sup> と、【原罪】<sup>カミシロリュウカ</sup> の  
能力が使えるようになる。

ただし、使うのに慣れるまでは各能力との対話が必要であり、至難の業である。

【錯削創】<sup>さたくれく</sup> 使用者：白谷藍季  
詳しい能力は不明。

【死の卓上（DEATH BOARD）】 使用者：索道勾雪  
ゲームに負けた挑戦者には死を。  
負けた挑戦者の知能まで吸収できる。

【吸収生物】<sup>バキユーム</sup> 使用者：アドウッド・ハモン  
強力な蛭を生み出す能力。

蛭はなかなかどれにくく、血を吸つたものの力まで奪う。

【親身一体】<sup>フューチャー</sup> 使用者：神？八紘  
親しいものと一つになれる能力。  
人だけではなく、物にも作用する。

【跪器具】<sup>シンビツ</sup> 使用者：死野絶

物を操る能力。

合体や、他の物質に変えたりもできる。

**【死者の手】** 使用者：希屋無声  
アンデットハンド

無数の手を操れる能力。

術者の力によって、出せる手の数は左右する。

**【蜃氣樓】** 使用者：水谷夕暮  
ミラールジュ

強催眠により、幻覚に近いものを作り出せる。

範囲は、術者の力次第。

私のお家では、生まれた子を剣士として育てるといつしきたりが  
“じきたり”といいます。

また、名前は金がつく名前しかつけにはならないのです。

そして、成人を過ぎたなら、  
剣士として、誰かに雇つてもらい、  
人を斬るのです。

「そーんな撃、ぜえつたい守らないからねーー！」

「？花！？」

そんな撃、古すぎる。

私は私らしく生きたいし、剣士なんてなりたくない。

「お兄ちゃんは真面目すぎるのよーだから錆皇じゅおうなんて堅苦しい名前、付けられるのよー！」

「生まれる以前から決まってただろー名前なんてーー！」

「うるさい、うるさいーー！」

これだから錆皇兄さんは融通つてものが利かないのよ。

いい年こいて、シスコンなんでしょう！

ああ、笑えるーーー！

「勝手に私のいいなずけを決めたらしいじゃん！もう、我慢できない！出でいくよ！」

「いいじゃないか！一回会つていい！」

「黙れ！お前が会つていい！」

「そんな言葉どこで覚えた！」

「うるさいー…もつといい！」

思い切り扉を閉めて、私は部屋に閉じこもった。  
ノートパソコンを立ち上げ、ブログを書く。  
絵師になりたかった。歌い手になりたかった。  
美容師になりたかった。パティシエになりたかった。  
でも、私はなれない。

家が私の邪魔をする。  
この「かみしろ守城」という家が。

長男は、頑固で融通が利かない。

一男は、女装壁のある変態。

三男は、優しいけどホントは下らな腹黒。

長女は、とても頭がいい学者（兼剣士。）

そして、次女のアタシ。

みんな剣士になつていつた。  
みんな人を殺した。

だけど、あたしだけ違つ。

あたしは、人を斬るどころか、刀を握ることすら怖い、

ただの鈍だ。  
なまくら

## 1刀（後書き）

いわゆる処女作つていうやつでしたw

誤字・脱字・感想等、お気軽にどうぞ！

## 2刀（前書き）

自分を鈍刀だといふ？花。

なんとか？花を“剣士”として一人前に育て上げようとする兄・  
錆皇。

そんな中、守城家に次男と三男が帰つてくる。

兄と妹の式刀始まり始まり

2刀

ピンポーン。  
ピンポーン。

インターホンの音が家に鳴り響く。

午後5時。

つまり、17時。

守城家にお客が来たみたいだ。

「はい？」  
錆皇兄ちゃんが出たみたいだ。

私はこたつでみかんの皮を剥いた。

どたどたと、せわしない足音が近づいてくる。

その途端、ガラツと居間の戸が開いた。

「？花！早く逃げるぞ！…！  
あの一人が帰ってきた！…！  
錆皇兄さんが、あわてている。」

が、それも虚しく居間の戸をこじ開けて  
その二人は入ってきた。

「**錆兄さん！？兄さん！**

「**お久しぶり！！！**」

みかんを差し出しながら手を振ると、錆兄さんがその手を払い

のけた。

「なにすんのよ、錆皇兄さん！」

「あいつらは教育に悪いから、中学生が見ちゃダメだ！」

「もう高2ですけど？」

すんなりと言葉で払いのけて一人の方に行く。

相変わらず、錆皇兄さんと、一人は仲が悪いみたい。

女装壁のある？兄さんと、

腹黒どSな錆兄さんは、一卵生の双子で同居している。

女装も似合つてできれいな？兄さんや、

いろいろ教えてくれる錆兄さんは、小さいころからとても好きだった。

「おー、相変わらずチビだな、？花」

「なんてこと言つてんの、気にしちゃダメだからね、？」

「うん、兄さんたちも変わつて無くて良かつた！」

「僕はー、兄さんより姉さんとか、かなつて呼んでほしいけどね

ー

「・・・黙れ男女

「ははっ、見てわかれば

おかま

「

鎌兄さんと？兄さんの挟まれて、三人で話をする。

「そういえば、？！学校行つてないんだってね」

「俺らだつて、授業妨害しかしてなかつたけどな」

「・・・だつて・・・。」

私は「」もつて口を閉じた。

「ダメだよ、ちゃんと行かなきや。」

「なんか行きたくない理由があるの？ほら、カツアゲされたとか？」

「いや、カツアゲつてねえだろ、今時。いじめとかじやね？」

「剣士に、

「剣士になりたくないから。」

ついに打ち明けた。

「ははー、それは、無理、、、かな？」

「諦める」

口々に兄ちゃんは叫んだ。

「な、なんで！…おかしいじゃん！」  
私は氣付くと叫んでいた。

そして、また今日も、  
部屋に閉じ「」もつて一日を過「」していた。



## 2刀（後書き）

引きこもり？花になっちゃった。

個人的には、錆兄さんの性格が自分に似てると思います。  
で、？兄さんは好きな性格です。  
こんな双子がいてもいいよね？

### 3刀（前書き）

守城家に次男と三男の双子コンビが帰省したそうです。

だけど、？花は今日も引きこもる。  
剣士なんかならない、学校も大嫌い。  
ほのぼの系引きこもり阻止物語。

「おい！？花！出でこい！」

# 耳障りな錆皇兄さんの声。 ひびきのいいおじさん

そうやって、いつもあたしを追い詰める。この家も、錆皇兄さんも、ぜんぶ、ぜんぶ、だいきらい。

気がつけば、もう夜。

時計代わりのあたしのノートパソコン（あいぼう）をつけた。

時刻は、23時55分。

もう少しで、一日が終わるな。  
と、閉ざされた空間で私は一人呟く。

「どうしてうつたのかな。」

『それは、自分がしたからよ。』

扉の前から聞こえる、誰かの声。

「嘘よ、私は逃げるために・・・」

『その意思是あなたのものでしょ?』

「違う、違う、ちがう、望んでない。』

『言い訳するなよ、ねえ?』

「黙れ、何を、何を分かつた気になつて・・・。」

『逃げることは、回避すること。』

あんた、何も考えてないじゃないか。』

声は、それを言つて消えた。

私は、あたしは、私は・・・。  
どうしたかった?

恥ずかしそうにこつむいた、？兄さんの顔は笑っていた。

### 3刀（後書き）

脱・引きこもりな？花ちゃんでよかったです。  
きっと、兄さんは元引きこもりです。

ビーでもいいナビ、錆兄さんがしゃべってなーや。

やっぱり朝はパン派の作者でした。

## 4刀（前書き）

脱・引きこもりおめでとうな？花。  
今回から、ゆるい学園物になっちゃいます w

今日から、中学校に通い始めます。

・・・3年だけど。

「ちょっと。兄さん。」

「・・・なんだ？」

何でついてくるのかなあ。

「愛する妹の初登校だろう?」

「うつさい、黙れ、死ね。」

「そんな言葉づかいするんじゃない!…」

「じゃあ、死んでくださる? お兄様?」

わざとらしい泣いたふりをしながら、兄はついてくる。  
・・・ホント、シスコンって嫌だよね。

「うひー、うひー、ちやん!…」

「あ・・・えと、理事長!…」

「もう、昔みたいに藍李<sup>あいき</sup>って呼んでもいいのに!…」

「じゃあ、藍ちゃん!」

フフフと、二人は笑いあう。

ちら・・・と、横目で錆<sup>じゆ</sup>皇兄さんを見ると、凄く不機嫌そう。

だつて藍ちゃんと、お兄ちゃんは・・・。

「おい、白谷<sup>しらや</sup>。てめえ、? 花と話すんじゃねーよ。」

「いつになつても、君は言葉遣いが悪いな。」

「あ、あん! ? ふざけんじやねえよ! お前が理事長なんて分かって

たら、この学校に入学なんかさせてねーし。」

「じゃあ、僕も君を不法侵入と認めて、警備員を呼ぼうか。このシスコンが。」

「くそ、本性表しやがって。こんな腹黒い理事長で大丈夫なのか？」  
この学校は！」

ペラペラと早口でお互にの悪口を語る二人の一人は、何を隠そう同級生だ。

私の兄・守城錆皇かみじゆこうと、この学校の理事長・白谷藍季しらやあこ。

家族ぐるみで、守城家と白谷家は仲が良く、誕生日もむちゅうどー力月違かづいのこの二人。

小さいころから仲が悪く、一緒にすると毎回喧嘩けんかしていたそうだ。極めつけは高校時代に風記委員会ふうきいんかいで不良で全面戦争を起したらしい。

そんな二人だ。

「藍ちゃん、私の、クラスって？」

「ああ、3年4組だよ。」

「じゃあいくね！ ありがと。」

軽く走りながら、昇降口まで行く。

はあ・・・。団体行動とか、苦手なんだけどな。

この学校は、一日一時間・実戦練習があるそうで、死傷者が絶えなく出ているらしい。

私は、こんな学校でやつていけるの・・・かな。

教室について、自分の席に座る。周りがザワザワしている。

あ、そうか。私が来たからか。

その途端、ビチャッと、液体が顔にかかる。不思議に思い、顔を拭うと手は赤。目の前には、半死人と男。

「オイ。そこの女。名前は？」

切れちゃっていいですか。

俺様なのは、兄貴だけで十分だつ一つの。

「おい、俺が聞いてるんだから・・・」

「何様だ、あんた。自分から名乗れよ。」

はは、相手がポカンとしてるや。

どうな兄貴のおかげで、私、口だけは強いんだw

「は？俺を知らねえの？」

「うん。っていうか、話し方なれなれしい奴嫌いだし。」

ははははと、男は笑って、私の方を見る。

「錐崎仁<sup>きしさきじん</sup>也つていうんだ。それは失礼。」

え  
錐崎仁也  
だつて  
！  
？

。

## 4刀（後書き）

錐崎さんの正体は次回で。

白谷理事長とお兄さんは書いてたのしそうだねー！

錐崎「一也」。

学生アイドルとして有名で、ジャニーズ所属。  
俳優の仕事をこなす、売れっ子芸人…

が、目の前にいる。

しかも、殺傷事件を起こしている。

「なななんで！？」

「は？ 意味分かんねー。」

ははは、と軽く笑つて受け流す。

「めんどくせえ事に、この学校、学年首位が学校案内しなきゃいけ  
ねえんだよな。」

「はあ。」

「ほら、ついてこい！！！」

腕を掴まれ、ふらふらしながらも、錐崎さんについていく。

「「」は、3年塔でな。1～12組まであるんだ

「はい」

「「」の下は2年塔、でその下は1年塔。」

「はあ…」

「じゃあ、次は教室塔じゃなくて、別校舎に行こうか。」

「保健室からで」

第2校舎1階 保健室。

「おー、錐崎。また殺つたのか。」

「はいはい、うつせーな。あ、こいつ保険医の字神なあさがみ」

「はじめまして。守城もりじゆう?花うかです」

「あーあー!なんだ、錦皇におりの妹?」

「はい、そうです!」

「久しぶりだなー!あ、おぼえてない?紫煙しづえんだよ」

「! ! !」

字神紫煙。

錦皇兄さんと藍ちゃんと同級生で唯一喧嘩を仲裁できる人。

「紫煙さん!」

「知り合い?」

「黙つてな、錐崎。久しぶり、?花」

「錐崎さんって、いつも殺つてるんですか?」

「あ、仁じんってよんで!」

「お前…そんなことしたら、理事長じりじやうに停学ていがくされるが…」

「いや、いいですよ?じゃあ仁?」

「まあいつもの事だよな?字神?」

「そうだが…、お前ら、時間…」

「あ! ! !」

走つて、教室に戻る。

なんだか。友達が出来てよかつたなつ

「ああ、もつなあ……。システム共一『藍季と錆皇』にまだひつ説明しよつか……」

保健室で、手当てをしながら弦く保険医を別に陽は暮れていった。

。

一時間目は、国語。  
二時間目は、数学。  
三時間目は、社会。  
四時間目は、英語。

これまで、普通の学校通り……

だった。

「あの、仁さん? 次つて? ?」

「? ちやん、友達いないの? あと、仁でいいって!」

「いないですよ? すいません、癖なんですよ? 」

嘘です、癖なんかじゃないです。

クラス中の女子からの目線が痛いからです。

「昼からは、実技なんだけど……」

アレ?

「仁さんの後ろ……」

「スパン！！」

「痛ッてエー！」

「なあに女の子たぶらかしてるんやー」「せつー」

「違うつてーほら、不登校してたー！」

え？ 誰誰？

スゴイ美人さん…で、関西弁。

大和美人つて感じで、色白長髪で…！

「ああ！ 守城？ 花さんやね！」

「はい？ええと…？」

「僕は、水谷夕暮ゆうんよ！ 大阪生まれやねん！ ようしきなあ…」

ん…？ 僕…？

「おい、夕暮…。ふざけんな！お前も男だろー！」

「なにゆうてるん？ 僕はどー見たつて男やろ？」

「ええと…？」

夕暮さん、どう見てもセーラー服で、この学校の女の子の制服なんですが。

「ちなみに、僕は3・1やからーいつでも来ていいで？」

「はい！」

「やつたなーこれで友達増えたわあー！」

スゴイ上機嫌ですね、夕暮さん。

「これで、次のバトルシップにでれるなあ！」  
「何いつてんだよ！？」「コイツと組む気か！？」  
「しゃあないやろ！3人1組なんやし！」

あれ？なんか…。

話が全然読めませんが。

バトルシップ？何それ…。

「仁也、知らへんの！？花凄いんやで！」

「あの、話が…！話が全く分かりませんが！」

「お前は後回し！何いつてんだ夕暮！不登校がスゲえわけねえだろ  
！」

軽く傷ついたんですけど。

ねえ、後回し×不登校がスゲエわけねえだろ！のダブルパンチは  
酷くないですか。

o

「あの…、なんで人の黒歴史を…」

「もちろん、調べたからに決まってんやろー。」

いやいやいや。

ドヤ顔やめてください。

「こいつ、情報屋ができるほどスゲえ情報持ってるから。  
「アカン…」」うむ一時は、僕からばらすんやろーが！」

「うつせ。」

いやいやいや。

どうでもいいです、激しくどうでもいいです。

「あの…、欠場します」

「ダメだ」

話聞いてください…。

「開き直んじゃねーよ……！」

痛い、暴力反対です、仁さん。

「ちよつと待て…。じゃあ去年は?」

「情報屋さんに聞けばいいんじゃないですか?」

ツンとじり、違う方向を向く。

「分かった。」

「え…?」

「俺がお前が斬れない分まで、他の奴らを斬る。  
それでいいだろ?」「?」

なんか、仁さんがかつこよく見えた。

。

## 7刀（後書き）

「after」

夕暮「情報代、ちゃんと払いい！」

仁也「知るか！」

夕暮「ちょ…！？」ちゃん！仁<sup>じ</sup>がセクハラするねんっ…！」

?花「え…（引き

仁也「違ひ！誤解だ…！」

そういうや、一応イケメソ設定なのに残念な仁<sup>じ</sup>さん。

今日も絶え間なく。  
キャーキャーという歓声と。  
私に対する悪口が。

聞こえているんだけど……。

「なあなあ、？ちゃん“一刀流”って重くあらへん?  
「ばかじやねーのか、夕暮。重いわけねえだろ、な？」

いやいやいや。

この学校の人気組が、私に話を振らないでください。

つてゆーか。

なら！不登校なんてしなかつたらよかつた……。つて今さら後悔してます……。

「それはですね、太刀と違つて重さを一つに分散させてるんです。  
慣れるまでは少し重いですが。」  
「そうなんか……！」  
くしゃくしゃと、頭を夕暮さんが撫でてくる。

ああああああ！

そのたびに親衛隊?の方の目線が……。

「じゃ。俺らは、行こっか。」

「…？ああー一次移動でしたつけ！」

トタトタと仁<sup>じん</sup>さんの後を走って追いかける。

「あー、仲のいいことで。」

「紫煙<sup>しづえん</sup>さん！」

「あ、不良保険医。」

「黙れ仁。」

早くも火花を散らしている一人を横目で見て、これが犬猿の仲というもののかつて、始めてじゃないけど理解しました…。アハハ…。

「なんですか？紫煙さん？」

「ちょっとな、理事長が呼んでる。仁もだ。」

「は…！？俺も？」

「ざまあみろ！」

「保険医殺す…！」

「ダメですよー、仁さん！」

なんとか仲裁に入つて、妨げる。でも、呼び出しつて何だろう？

「仁さんー早く行きましょうよーー。」「あ…、ああ、わかつたつて！」

ぐいぐいと引っ張つて理事長室まで連れていいく。

何もしてなこのに呼び出しつゝ…。

こいつたこいつたことなんだろ。

。

「藍ちやん、あの、話して…？」

「この学校の理事長が（珍しく）懇親会に包まる。

「……おこ。理事長へ。」

あの、「あんが驚いてるから、かと珍しこんだわ。まあそれは、日常生活からも向ける」とだひつた。

「なあ…。仁也。」  
「はっ、俺？」

「は？え…？」

「なんですかんなに？ちやんこと仲が良くなってる。」

「俺だつて、ちやんとなりぬけりか？」

えつと…へ藍ちやん？意味がわからな

「俺だつて、ちやんとなりぬけりか？」

キャラが崩壊します…よ。

「コンコン。

「おー、藍季。

「なんだよ紫煙

何故か、なぜか、なぜか。

紫煙さんが理事長室に入ってきた。

「何を言つてんだ。つーか呼び出しつて……。」

「これは立派な不純異性交よ」「黙れ」

「まじめり。帰つた、帰つた。」

「ちよつと待つてーあ、イタイイタイーー！」みんなさに紫煙たこーー。

かるくキャラ崩壊してますね、藍季理事長……。

「結局何だつたんでしょうか……」「わざ」

「えー……。ああ、まあ……。」

「???」

「知らない方がいいこともあるって事じやね?..

意味がわかりません。

「あの、「さん?何の話だつたんですか?  
つていつか、何がわかつたんです?」

「…鈍いな…。自分で考えてみな」

えええええ!?  
そんなこと分かりません!

「じこんつーつかひひやーーーん!」

「わや!」

夕暮さん<sup>ゆふぐれ</sup>さんが空氣を切るように私に抱きついてくる。

「おこ、はなう「あのねー自分らトーナメント見はつた?」

「……(イラシ)

「え? もう貼り出されてるんですか? 見ましょつよ、仁「さんー」  
?花誘つてる?」

「??なんですか、ソレ?」

「いや、別にいい

何故か赤面する「わやん。

「わやー!此處に変態がいるわかい」

「うせえ！ 夕暮！ ！」

で、肝心のトーナメント。前の前に。

「一時予選あるんやなあー……。」「知らなかつたのかよ」「なんやて！僕が知らなくたつてもええやろー。」

卷之二

とつあえず、今日終了なわけですよー。

「おーおかえり」「ん。」

鎧皇兄さんがエプロン姿で出でる。

「今日、カレーだぞ」

「昨日の残りね」

挨拶（？）を済ませると速攻で、部屋に潜りこみパソコンをつけ  
る。

明日からなんか楽しみだなあ……。

「うう…、緊張するよ…」

ついに今日、バトルシップが始まる。

学年別に競う、このバトルシップ。

3年だけで31チーム、合計93人の参加者がいる。

なんで、私たちの方だけ視線が集まっているかといつと。

不良の中の不良、でも成績優秀なアイドル 錐崎仁也きじさきじんやと、  
見た目は女の子だけど実は男で、天才銃士ガンマンの水谷夕暮みずたにゆうぐれが  
一緒にチームにいるからであつて…。

「まあ、楽にやろうぜ」

「？ちゃんを傷つけよう奴は、僕がフルボッコにしほるから心配せ  
えへんになつ！」

「…、うん！」

二人とも、目が。  
目が笑っていないんですけど。

というわけで！

総勢93人のバトルシップスタート！！

…なんだけども。

「あー、保険医のあんかみ字神だ。

今回理事長に代わって、第一次試験の内容を話す。

第一次試験は…」

皆がゴクリ、と息をのむ。

「コレを取つてこい。」

と、紫煙さんが手に持つっていたものは、耳にハートのアクセサリーが付いている猫、だった。

。

## 11刀（後書き）

とうとうバトルシップ編に突入しました。  
キャラクターの名前がたくさん出てくるのは、準決勝（第一次試  
験）からの予定です。  
考えるぞー！

いよいよ始まつた“バトルシップ”

だーケービー…。

「聞いてない！聞いてませんよーーーーー！」

一次試験（＝一回戦）は…。

ハートのアクセサリーをつけた黒猫を捕まえてくる事だった。

「むう、スカートって動きにくいわあー、えい！」

「ゆゆゆ夕暮さん！？」

「人目を考える、夕暮。」

「だつて僕、一応男やで！」

スカートを脱ぐつとする夕暮さんに視線が集まる。  
伊達に学校のアイドル（的存）じゃないなあ…。

「もちろん、短パン履いてるでっ！」

うわあ…。今ので何人の追っかけの心が折れたか…  
フツと軽蔑するように笑つて見た先には…。

W

「あーあやこー仁さん！」  
「おひー！」

走って向かった先の猫が。

「え？ 飛ん…！？」

M・A・S・A・K・A

## 12刀（後書き）

ギャグっぽく書いてみたけど、普通よりも時間がかかりました。

向いてないって感じですね、はい。

みんなみんな“飛ぶ猫”めがけて走る。

体術に優れたものはここにとこうように、走る。  
戦術に優れたものは、すぐさま戦略を練る。

私はというと。

何故かバカ兄<sup>鋼皇</sup>さんに日頃鍛えられていたから、意外と体力はあつたのだけど……。

休憩、休憩。

高い所（多分校舎）に登つてみる。

落ちついて息を吸つて、吐いて。

改めて観察をしてみる。

よくみると、この猫……。

後ろにバックステップするとき、「

ハートの形が丸になつて

！？

やつぱりそつだ。

大きくまた息を吸ひ。

そして、校舎から飛び降りる。

猫を追いかけ、ポイントを忘れずに…！

で。

捕まえられましたっ！！

。

一次試験も終わり、私はいつたん泊まることになった寮の部屋で休む。

寮というよりも、普通のビジネスホテルに近い作りになっているその部屋は、豪華で広い。

二次試験からは、いよいよ実戦。

つまりは“殺し合い”で、死者が出てもかまわないみたい。

いつも丹念に手入れしてある、二つの剣をそつと触る。人を斬れなくなつた、剣士として“鈍”な私が握る剣。長い方を「蒼零刀」短い方を「想朱刀」と、銘柄が打つてある。

そつと、その刀を撫でる。

『あの』事から。

私は刀を握るだけで恐怖するようになつた。

「なんでかな…。」  
頬を涙が伝う。

『あの子』は、殺してしまつた。  
唯一のライバルで。

とても優しくて…。

涙を拭って、皿をつぶる。

もつ、寝なこと…。

。

## 『あの口』 壱

?花、5歳。

小学一年に上がる・またはなつた記念の年。

その年の4月1日。

その日ひが、悲劇の『あの口』…。

「おにいちゃん、今からなにするの?」

「大会だよ、?！」

「なにの?なにの大会?」

「…、何つて…、もちろん戦闘の…」

「おにいちゃん!優勝してくるね!」

「そしたら、りゅうのこと、褒めてくれるでしょ?」

「…ああ。」

死すらありとする、真剣勝負の子供部門。

それに参加することは、守城家できまつている家訓。

?花は、偶然か。それとも必然か。  
優勝まであと一人の所まで勝ちぬいていた。

その時、一生後悔する」と起じてしまったのだ…。

「はじめまして、守城？花です。歳は5歳だよー♪うしくね～」  
「あ、僕は粕谷優…。5歳だよ、よろしく…。」

相手は優くんつてゆー子。

なんとかしらぬいけど、勝ち残つちゃつた！  
でも。これに勝てば、錆皇にいけやん達に褒めてもうれるやー<...  
がんばろーっと。

「ready..。go...!」

勢いの良じ審判の合図とともに、飛んで優くんに斬りかかる。  
優くんは、私の剣をうまくかわし槍で後頭部を殴ろうとする。  
その槍を長刀で止める。

(中略)

20分も続くと、さすがに体力が限界近くで、私はフラッとした傾き  
かけた。

その瞬間を見計らつて、優くんは槍で私のお腹を突いた。

衝撃でステージの壁まで飛ばされ、カウントがはじまつた。



## 『あの匂』 売（後書き）

今更ながら、携帯で見ると、花の?の?と、?の字が?になつて  
ますね……  
りゅうは、金留  
かなとは、金質

結構気に入つてるので、出でないのが悲しいです……

『あの匂』は、結構重要なキーパーツですので、ゆっくり読んで  
じつへくださいね……

『あの口』 武

壁まで飛ばされて、血を吐いて倒れる私。  
口から血が伝づ。

なんか、兄さんが叫んでるや。  
負けたら褒めてもらえない。  
だから、勝ちたい。

負けなんて嫌。  
勝ちたい  
！

つぎの瞬間。

“？花”は？花じゃなくなつた。

?花、いや“？花”だつたであろう人”は、体の上に乗つた瓦礫を素手で粉碎し、どこからか出した短剣ナイフを手に取り立ちあがる。周りの観客からすれば、『5歳の女の子』がそんな事ができるはずない。

否、アレはきっと違う人間と言つといふであつ。

答えはどれも、�〇。  
アレは、『只の5歳の女の子』の能力だ。  
その能力を【七大罪】

『あの匂』式（後書き）

能力とかつけると、厨二へてしまいました！  
あ、でも元から厨二病だ！

【七大罪】なので、もつとつていうか七つの人格 + 原罪りょうざいつて感じ  
になります！  
せりつとネタばれ！

?花の能力、【七大罪】。

今出ている能力は得体が知れない。

黒かつた髪は白くなり、

目はツリ目になり、歪んだ笑いを含んでいた。

“？花”は怯えた優を見つめると、優の直前まで跳躍、さらに頭を片手で掴み上げた。

「う…ああ…う…っ！！！」

怖さのあまり、悲鳴交じりになつた優の声が漏れる。

「坊ちゃん、遊びましょお…？」

歪な笑いでクックク…。と笑う“？花”は、微笑む素振りを見せた。

「ば…化け物め！」

優は槍を握りしめ、“？花”的心臓を狙い放った。

しかし、その槍は“？花”が前に出した左手に刺さり、止められる。

そして“？花”は、頭を掴んでいた右手を、優ごと地面に振り下ろした。

## 『あの口』死

メキヤという嫌な音とともに、優は地面に振り下ろされた。

「ああ、くそ…。ダメだな。頭部破壊ぐらいはよゆーだと思つてた

んだが…。」

“？花”は、ぶつぶつと咳く。

審判があわてて止めに入る。

「きゅ…救護班！！今すぐ救護班を！！」

同時に、“？花”は倒れた。

白い特徴的な髪は元の黒髪に戻り、優から受けた傷が全身に戻る。

それから。

救護塔の中は、すすり泣く声が響いている。

【七大罪】がやつたことは、まだ能力を操れていない？花にはわからなかつた。

「なにがあつたの？負けたのは、あたしじゃないの…？」  
と、ベットの上で聞く？花に兄達は何も答えられなかつた。

ある日、リハビリがてら、散歩に出ていた？花に、優の母親が偶

然会う。

会つて一言言わたのは…

『ひどいひし』



また、あの声が聞こえる。

『ひとりひし』

私がやつたのか、それとも誰かがやつたのか。  
優くんは、死んだ。  
なんで…？

「りゅうしづちやーん！」

夕暮が元気に部屋の扉を開ける。

「あ、夕暮さん！」

余計なことなんて、今は考えられない。  
だって、今は、その…。

「どうした？恋でもしたん？キヤツ…」  
「い…い…いえいえつ！誤解です…」

「こんなこと、言えない。  
絶対に言えない…」

「やつこいえばね、りゅうしづちやんに対戦相手を教えるのを忘れてたん  
や…

はこ、ビーン

「わーつよー」「強いよー」

え、ちょっと…。夕暮さん…。

「頭脳派チームー?ってゆーか、ガリ勉眼鏡?

みんな頭いーんだわあ…

ふう…。と、夕暮さんはため息をつく。

「じゃあ、全員遠距離攻撃とかですか？」

「もちもちーじゅ、僕は今日の所はお暇するでー！<sup>いじま</sup>

明日、がんばりつー！」

「…はいっ！」

「よしー!がんばるがーー！」

波乱万丈のバトルシップ予選開始！

「lady's and gentleman!

最注目の3年バトルシップの開催よおつ！

司会及び解説は私！1年医療学教師の太刀渡安曇たちわたり あすみよん！」

あんなテンションの高い先生がいたなんて信じられない。  
…覚えておこいつ、と。

「今日は理事長と不良保険医にも解説としてきてもうりつたわよう！  
だから充に分に！暴れてちょうどいいねえ！」

「不良保険医ってなんだよ！安曇！！！！！」

「はいはい、無視無視。

それでは、第1回戦！早くも注目のカード！

“錐崎・水谷・守城”チームV/S “盾野・威早・福生”チーム

よん！”

「いやー、注目の一戦だね。」

「そうですねえ、理事長！」

錐崎・水谷の秀才コンビと詳細不明な守城さんのチームが勝つか！  
もはやお馴染み！盾野・威早・福生の頭脳チームが勝つか！

「そうだね、分からぬいね。」

「つてお前も変わり身早えんだよー。」  
紫煙さん、ツツコウ!!

「それでは登場して頂きましちゃう！」

楽しみだな、いや、怖いな。  
…キドキする…！

「第一回戦開始です！」

ピィイー！……！

高らかになる笛の音でバトルシップは始まった。いきなりその太刀で仁さんは相手に斬りかかる。それを援護するかのように、夕暮さんは銃を撃つ。

私は少し遅れて、相手の一人に斬りかかる。

たしか、ルールは相手を地面に倒せば終了だから――！  
二つの刀を使って、相手に反撃の隙も与えず斬りかかる。

「　　っ！」

相手の一人、確かに福生くんの撃つた弾が足に被弾して、思わず後ろに下がる。

「？ちゃん！――！　大丈夫――！？」

すぐに夕暮さんが福生くんの手元を狙つて、銃を撃つ。

足から大量の血が出て、『あの日』をフラッシュバックさせる。  
血、血、血、血。

「？花！危ねえ！――！」

仁さんの声にハツとして、剣を握る。

相手が飛びかかってきた。

相手の武器は槍。

反射のタイミングが遅かつた私は、右腕に傷を負う。

飛び散る血飛沫。

赤の世界。

「！」

自分の中から声が聞こえる。

そうか、あの日も。

優くんを殺つたのは私。

私であり、私の潜在能力！

「【七大罪】！」

発動と同時に、私と大罪は入れ替わる。  
そう、そして…！

「痛いじやん。」  
姿も能力も。

「？ちゃん つ？」

「？花！？」

周りはどよめく。

バカリと相手の槍を折り、驚いている相手を膝カツクンしたら簡単に倒れた。

「アウトー」

周囲は驚いた眼で“私”を見る。

髪はロングで後ろに一つで束ねている。  
体つきも違い、目は以前より垂れている。

今回出てきたのは、  
私の潜在能力【七大罪】<sup>スロウス</sup>のうちの一つで、  
その名を怠惰といつ。

「…おはよう。」  
あ、あらりりり。でももう寝かあー…

ふあああ、とあべびをして、怠惰は答える。

「お前、誰…！」

「怠惰は？花の中の怠惰だ…能力」

それだけえー…」

怠惰はわざりこりとい、粗手に近づき首筋を素手で呑めさせた。

「…－Wine－錐崎、水谷、守城チーム…－！」

バトルシップ、第一回戦終了。

一方その頃。

?花は、自分の深層意識にいた。

「はい！お久しぶり、?花！」

「色欲ちゃんよん」

「色欲…？」

「そう、色欲。

貴方の中の整理も担当しているわよー」

「へえ…。」

周りをぐるっと見回すと、そこには6人の人がいた。

「紹介するわねえ、」

まず、一番近くで鏡を持つている人を指差す。  
自分を見て、うつとりしている。

ちなみに、縦カールですごく貴族っぽい。

「傲慢ブライドですわ、どうぞよしなに」

次に、その横でたくさん食べているが、太ってはいない女を指差す。

「…暴食グラトニー、よ、ろ」

ガツガツとご飯をかきこみながら、暴食が言つ。

その近くで、暗い目をした男を指差す。

「あ、なんだ、俺なら強欲グリード。」

皆を交代でみて、ため息をついてる女を指差す。

「…、ハア、嫉妬<sup>エンガイ</sup>、よ。」

「最後に…、ほら、あそこ。」  
鎖に繋がれた、野性を思い出すような男を色欲は指差す。

「…、憤怒<sup>ラース</sup>うう…！！！！！」

？花は全力で走り、殴った。

そして、襟をつかんで憤怒を立たせた。

「よう、久しぶりじやねえか。」

「なんで、殺した！ 優、くんを！！！」

「思い出したのか、つまらねえな」

そういうと、憤怒は軽々と？花を振り払う。  
？花は後退し、構える。

「野蛮人みたいじやねえかよ、俺が。」

『そんなわけないよう、いけないのは君だお

肩にいるぬいぐるみがしゃべる。

「なん…で…！」

『僕らあは悪くない！ 君が能力を使いこなせばいいのー…』

「使い…こなす…？」

「原罪、か。珍しいな喋るの。」

『？花は僕う、僕は？花だからあ…ねえ』

クスクスとうさぎのぬいぐるみは笑う。

『難しそうたかなああ？

そろそろ帰りなよう、  
怠惰<sup>スロウズ</sup>と入れ替えにねええつ！』

「え、まだ聞きたい事…」

『僕らはいつでも君の中にいるからあ、大丈夫う！』

「…でも…！」

『早く行かないとお、君の友達が心配してるよう』

不気味に微笑んで、ぬいぐるみ改め原罪はゲートを作り、私をその中に放り込んだ。

目を覚ますと、前には仁<sup>じん</sup>さんと夕暮<sup>ゆうぐれ</sup>さんが居た。二人とも、らしくない不安げな顔を浮かべている。

「どうしたんですか、そんな顔らしくないですよ？」  
「ふあ…？ちやあああん！…」

夕暮さんがベットにダイブして私を抱こうとしたところを、仁さんが夕暮さんをつまんで、止めた。

「その、悪かつた…な。」

「いえ、大丈夫ですよ！記憶も戻りましたし！」

そう、記憶。

そして深層意識で掴んだ潜在能力【七大罪】<sup>しちざい</sup>、も。

「だから、泣かないでください。

もう、足手まといになんてなりませんからー。」

私は苦しそうに見る二人に笑つて見せた。

「ふ、ざけんなよお前らあああーーー！」

「なんだ、いつかの不法侵入者。」

「黙れ、藍季。そして死ね」

「君こそ敬語を使つたらどうかな？野蛮人が」

理事長室では、犬猿の仲コンビの火花がバチバチと散つていた。

「はいはいはい、stop!止まりなよ、錆皇ちゃん！」

「黙れ、安曇つ！」

「喧嘩はよくねエぞ」

「く、そつ！」

錆皇は、藍季に掴みかかつっていた手を放しバンッと、机を殴つた。

「知つてるだろ！お前らも！」

「花に潜在能力なんて使わせたら『あの日』の記憶が…！」

「好都合じゃないか。」

「つテメエ！」

藍季を錆皇が睨みつける。

「知つてるだろ、この学校の卒業者なら。

バトルシップはただの戦いごっこじゃない。

潜在能力を効率的に発動させる場所だ。」

「だが…。」

「はいはい、いい加減sister complexも卒業したらど

「うへ。

もう寝よう」**ト**があの子の為こはならな<sup>イ</sup>年頃でしょ?」

「…『女體』

「せひ、お前の妹なら救護塔こ<sup>ト</sup>るから。明日ベジ<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>は退院できるわ。逢<sup>ト</sup>てに行つてやれよ

「うぬせえ、お前ひなんか嫌いだ。」

『いいのう、？う？』

「何がですか……？」

『……ん、気づかないならあ、いーかあ……』

相変わらず変な間延びした声でつむぎのストラップもとい、原罪は話しかけてきた。

私は、着替えを済ませ朝食のパンをかじった。  
苺ジャムの甘い匂いが漂つ。

『バトルシップのお、トーナメントじつになつてゐるのかなあ……』

「……はい。」

夕暮さんに書いてもらつたトーナメント表を原罪に渡す。

負傷者の手当でが大変なので、実行される試合は一日一試合で今日

ある試合は、  
死野絶、希屋無声、愛尾不離

VS

白井唄、古田光、舛谷槊

となつてゐる。

見に行こうかな、なんて呑気に私はソファーでくつろぐ。

「そうか、私たちは明日試合なんだっただ……。」

ふと思いつ出し、夕暮さんにもうらつたデータを見てみる。

明日の対戦相手。  
索道匂雪、神祇八紘、アドウッド・ハモン。

え。不思議チームって何それ……。

『おおいー、？花あ色欲が呼んでるるうー』

「ハイハイ、繋いでください！！」

「ハロー！？花！！

明日はいよいよ試合ねつ

「相変わらず陽気ですね、色欲さん。」

「んふ、いーじゃない？

能力全員準備は整つたみたいよ、それだけよ！」

「わかりました、ありがとうございました。」

戦う。

殺さずに戦つ。

難しくても、殺さない。

それが私の掲げた新しい課題だった。

いつも忙しく時間は流れるものであつて、  
1回戦の勝者は死野絶しおぜつ、希屋無声きやむせい、愛尾不離あいおふりとなつていた。

「やつぱり。アイツらか…」

「うそ…、やりすりいわ…」

俺は、夕暮と部屋で話した。

「一回戦も厳しいが、一回戦も厳しい。くじ運ねえな…」

「うちが引いたんやないもん！」

じ、仁にんやるお…？

そないな目で見んといつ！」

「はいはい…」

そもそもくじ運が悪すぎた。

?花ひなのあの潜在能力ちからに頼るのは、極力控えた方が良いだろう。

一回戦から、不思議チーム。

アイツらは殺りにくいし、闘いにくい。

一番嫌いな…

「はははっ、苦しむ優等生見るのって楽しいね。」

「……質たちが悪い。」

生徒宿舎を防犯カメラで覗く、藍季あいきと紫煙しづえ。

「何もかも、お前の言つ通りって奴か。」

「ああ、勿論。」

いいや、あの人のひとが仕掛けた事、なんだけどね……」

クスクスと黒い笑みを藍季は浮かべる。

「……【錯削創】……。」

「全く、皮肉な能力だ。」

「簡単……の間違いでしょうが。」

藍季はワインを一口、口に含んだ。

「さあ。能力開花のショータイム……だ」

紫煙は下したを向いて救護塔へと歩みを進めた。

「さあさあーいよいよ一回戦目つ……はーじーまーるーよつ  
わあああと言う威勢のいい声が後からついて聞こえる。

「さあさあ！

不思議チーム▽Sバランスチーム！！

どちらが勝つかなあ…？

それでは…HereWeGo…！」

今回のルールは、引いたカードの規定位置からスタートするという、シンプルな方法だ。

ちなみに、私は校舎。

ひ…広すぎる…！

『なあなああ、う、うちらあは有利いよお。』  
間延びした声で原罪が言ひ。

「なんで…ですか？」

『近くに三人居るう…。

校庭に1人い、屋上に1人い、二階に1人い…は味方かあ…あ』  
「わかりました！！」

現在地は一階中央階段。

1校舎（特別教室塔）と2校舎（教室塔）をつなぐ廊下の一階。

とりあえず刀をすぐ出せるよつに閉め…つて…

「…」

『見つけた！見つけた！  
私の相手してくれそうな強い人おつ！』

：腹話術師いつ！？

私は、すぐさま刀を構えた。

「…3年1組…番号空位。」

守城？花で…す…」

『うきやきやきや！』

2組番号10…つ！ルウェイ＝スツールとお

「…神？八紘…」

：勝負つ！？

勇ましい音が一階から聞こえてくる。  
確か下は？ちゃん…やつたな。  
お盛んなこと、アハハ！

上に昇ろうと私は、階段へ行く。

その瞬間、見覚えのあるシリエットが皿ひついた。

「索道…匂雪…つー？」

「…夕暮…ちやん…」

「おーおーおー。

結局俺らが最後かよ。

なあ、楽しもう、ぜ？」

「no problem.

僕は貴方を殲滅して終わりですカラ。」「…ちつ…。

ムカつく野郎だぜ…。

3年4組番号1…つー錐崎仁也…つー

「3年1組NO.19!!アドウジト・ハモン

此方からも、激しい爆音が鳴り響いた。

「僕らは頭脳戦と遡こうか。」

「ええ、僕、アホやで？」

「…見えは張らないで結構。

「君が学力テストで学年1位なのは知ってるさ。」「はあ、大層なことで…」

「君の知らない間に、僕は強くなつたんだよ、元・世界チャンピオン」

「饒舌は結構やで。」

「ふ、まだ分からぬのか？」

「【死の卓上】(DEATH BOARD)】つ---!」

あり得ない、有り得ない。

潜在能力が、こんなにも適用されている…なんて。

『さあて、さて。

僕らの能力は何でしょつか…？』

「……秘密」

「原罪つ…！」

『嗚呼、有り得ないい！！！

こんなに能力を開花させる奴は、【憤怒<sup>イライラ</sup>】と戦つて死んだあ…  
優だけ。』

「早く終わらせないと…！」

「チエックメイト。」

「…つ！」

「【死の卓上（DEATHBOARD）】…かあ。

ちい…つとは楽しかったわあ！！で。次は何するのん？」

今、ケリがついたチエス。

それ以外にも、将棋、将棋倒し、フ並べ、五目将棋、こいこい、ページワン…などなどと、机の上にゲームの残骸が残っている。

「リバーシしよか？大富豪やポーカー、ブラックジャックでもええで？」

「…つ！」

知能指数（IQ）200を超える天才児夕暮。それが夕暮の真骨頂であった…。

「おいおいおい。

お前、潜在能力つ……！」

「ええ。悪いです力？」

「うおつ！」

俺は、咄嗟に相手の召喚した混合獣<sup>キメラ</sup>の攻撃をかわし、話しかけた。

「……混合獣は能力じやねえ……な……！」

「……セア？」

俺は、背中の太刀を掴み、混合獣<sup>キメラ</sup>を粉々に切り裂いた。

「……かかつてこいよ」

「……No problem……」

また、刀と混合獣<sup>キメラ</sup>の爪が接触して会場全体に響き渡った。

「きやーこわーい、

こひされちやいセーフ（棒読み）」

『……チイツ！…』

「いやだーあ、あ、ヤバい。』

『色欲<sup>ラスト</sup>お…。真面目にしてい…』

「アイツ、が、来る…』

『ふつ…ざけんなあ！！！』

薙刀で攻撃するの攻撃を避けながら、色欲<sup>ラスト</sup>は言いつ。

「お…なか…空いた。』

そして、また光を帯びて、花の身体は変化する。

『…「あ、あー…』

「お腹すいた。

【親身一體】

フューチャー

7大罪の内の一つ。

グラトニー  
暴食。

比較的?花の中の能力では1・2を争ひ温厚もだ。

ただし。

あくまでもそれは日常の事であつて、食べる物が無くなると暴走状態になる。

「…くつ。」

『…はあ?』

「…疑…?」

喰喰喰喰喰喰喰食食食食！

『ぎざぎざぎざ…!?』

グラトニー  
暴食は人形に手をあて、食した。

グラトニー  
暴食の能力。

それは、?花の何処からでも口を作り、食す。

からだ  
グラトニー  
そんな事から、暴食の暴食モードと称されている…！

『……痛い…!』

片腕を食いちぎられた人形は、八紘と一緒に後退し、呼吸を整えた。

「…喰づ。」

一ヤリと不敵に笑う暴食はまるで動物を解体する料理人…いや、医

者のようにだ。

「Oh... shit...アリエナイ...」

アド...長いな、ハモンでいいか。

奴は空中にあるポートに出た、『LOSE 索道包囲』の表記に吃驚している。

「早く片して違う子も負けさせなケレバ...」

「やつてみな...」

地面にさして置いた太刀をひと蹴りし担ぎあげ、中断していた戦いにまた緊張が走る。

「Oh...【吸收生物】...」

「...」

か弱い生き物。

されどか弱い生き物にも、強い生き物は存在する。

【吸收生物】は、ある生物の混合種である

「なつつ...！」

分散し、仁の体に【吸收生物】は付く。

急いで【吸收生物】を落とそうとするが落ちない。

「...蛭か...」

「yes -蛭です!」

その瞬間。

仁は予想外の行動に出た。

自分の皮膚」と【吸收生物】<sup>パキーム</sup>を削ぎ落としたのだ。

仁の腕から。足から。

とにかく削ぎ落とした部分から、血が吹き出る。

「どうした？ 来いよ。」

「oh! ! so , dream on! !」

不敵に仁は微笑んだ。

断末魔のよつな叫びが、全体に響き渡る。

ハ紗は相手してはいけない人（能力）と相手してしまった。

**【親身一体】**をこの場で発動したハ紘の選択は、まさに“鴨が葱を暴食が止まるには、何も食べるものを無くしてしまえば良い”こと。  
（フューチャー）  
背負つてくる”行為。

言わせておこう。才能の使い道が悪かったのだ

戦士として、八紘は屈辱を味わつた。

「ゾーリーでショウウー!?」

「本當だ、そして、俺はお前をぶつ潰す。」

「Ha! そんな体で何ができるって言うのテス?」  
笑止ですネ、ヒーロンは笑う。

תְּמִימָנָה וְעַמְלָנָה

۱۰

だんだん仁は距離を詰めていく。

「や、止めまショウ！紳士的に！」これは私が負けまさか

「遅いな」

その瞬間にアドウット・ハモンは首を斬られ……

「アハハハ、アハ、アハ」

「これで負け、だろ？あー殺したかった！」

WIN！錐崎・水谷・守城組！

試合が終わって、二人は俺に駆け寄った。

「あ、あの仁や…、つ、なんで斬らなかつたんですか？」

「あ？いいじやないか」

「ふふふ、鈍いわあ！？ちゃん！」

「あんな、仁はな…」

「夕暮えええええーーー！」

「？喧嘩はダメですよー？」

？花は何も知らず夕暮に殴りかかる俺を止める。  
鈍いな。本当に鈍い。…きっと、俺よりも。

どうやら俺は恋してしまつたらしい。

そして、相手が相手だけに前途多難みたいだ。  
でも、必ず守つてみせる。

そして、俺は潜在能力をこの世から消してみせる…！

「ああ…、つまらないね」

藍季は椅子に座り、ワインを口に含んだ。

どこともいえず、どこか見たことのあるような、そんな曖昧な暗い部屋の中に4つの影が浮かぶ。

「やあ、同級生。

『あの方』から連絡がきたよ」

どこか一方通行な話を藍季はする。

「ちょっと待てよ。

死にかけていた奴が?」

「無礼な口をつぐんで欲しいね、錆皇」

「事実だろ。」

藍季は『あの方』に能力を『えられたときから』『あの方』を深く信仰している。

それは3人が分かつていていた事であつた。

「で、何だつたんだ?」

「ある2名の生徒に興味があるらしいよ

クスクスと、藍季は笑う。

「守城?花と、水谷夕暮に、ね

異様な空間の扉を閉めて、俺は家に帰る。

自分が殺そうとして自分が殺された奴に興味を持つとは意外だ。

『あの方』、それは人間の第2の始祖。  
現在の名は「粕谷優」<sup>そめや ゆう</sup>であり、本名を『Noah』<sup>ノア</sup>とづ。

### 3-1刀（後書き）

これを投稿するあいだ、2回「データが吹っ飛びました。リアルに泣けました。

参拾刀突破ありがとう！

回を重ねることに方向性が不明になつてきてしまひます。

「Win!! 樋、夏目、戎谷チーム！」  
ビュン、と“夏目”と言う剣士が剣についた血を祓い、鞘に納める。

「凄腕の剣士、ですね」

「でも、次は勝てへんかも・な！」

夕暮がクスクスと笑っていた

「ああ、なんせ2年連続優勝チームがいるからな」「仁さんがある3人に指を指す。

「明日の初戦。よく見とけよ」

「終音ちゃん」と来ちゃんと智ちんが出てくるんやからな！」「とも

「智ちん…？」

「その呼び方はやめろって何度も言つてるだろ」「…？」

「え…？」

「智！」

仁さんが薄い茶髪の男に近寄る。

クールそうな仁さんと、チヤラそうなその人との見た目のギャップがとても浮き立つ。

「…智、何…話始めた…」

「あ…来ちゃん！」

「…夕暮…」

とても背の低い女の子が嫌そうな顔をする。

「はいはい、止めーやー！」

パンパンと手を叩いて、もう一人女の方が上から階段を下りてくれる。

珍しい、色素欠乏症の女の子だ。アルビノ

「はじめまして、うちば、初終音つて言います」

あつけにとられた私の前に、終音さんが立つ。

「あ、初めまして！守城？花です！」

「よろしくな！ほら！一人とも！帰るよー！」

「...了解

「はいはい！」

さらにはあつけにとられた。

「終音ちゃんと智ちゃんは剣士で、来ちゃんは銃士ガンマンやでー。」

いつの間にか夕暮が隣にいた。

「去年、クラスが一緒だつたんだよ」

「あ、仁さん！そなんですか」

「まあ、よう考えればあのチームが一番強いって言われとんな...」

！」

最強のチーム…か。

今日会つたのがその3人とは、驚くしかない。

「相変わらずだね、僕の創った学園は。」

「その様で御座いますね、Noah様」

目立つ印象を与えない優男が、隣に立つモデルのような女性と話す。

「どうやら、バトルシップという戦闘行事が行われている様で御座いますが…。」

「じゃあ、編入はその後、かな。一旦遊びに街に出よう

「…御意。」

不穏な空気を見に纏う二人は、とりあえず学園を後にした。

「ふええ…すごいわあ…！」

『この位い、当たり前ええ！』

どや顔を決める人形（原罪）とその横に夕暮が立っていた。

対戦後の暴食を止めるのは、骨が折れる程だった。

満腹状態にするため、まずは仁の怪我を喰い。そして救護塔の怪我人の怪我を喰い。

よつやく暴走が解けた。

『夕暮はんん。アンタもおお、怪しいなあ』

「ふええ？ 秘密やよ」

「ヤー、ヤーと二人は笑いあつた。

「Win!! 樋、夏目、戎谷チーム！」  
ビュン、と“夏目”と言う剣士が剣についた血を祓い、鞘に納める。

「凄腕の剣士、ですね」

「でも、次は勝てへんかも・な！」

夕暮がクスクスと笑っていた

「ああ、なんせ2年連続優勝チームがいるからな」「仁さんがある3人に指を指す。

「明日の初戦。よく見とけよ」

「終音ちゃん」と来ちゃんと智ちんが出てくるんやからな！」「とも

「智ちん…？」

「その呼び方はやめろって何度も言つてるだろ」「…？」

「え…？」

「智！」

仁さんが薄い茶髪の男に近寄る。

クールそうな仁さんと、チヤラそうなその人との見た目のギャップがとても浮き立つ。

「…智、何…話始めて…」

「あ…来ちゃん！」

「…夕暮…」

とても背の低い女の子が嫌そうな顔をする。

「はいはい、止めーやー！」

パンパンと手を叩いて、もう一人女の方が上から階段を下りてくれる。

珍しい、色素欠乏症の女の子だ。アルビノ

「はじめまして、うちば、初終音つて言います」

あつけにとられた私の前に、終音さんが立つ。

「あ、初めまして！守城？花です！」

「よろしくな！ほら！一人とも！帰るよー！」

「...了解

「はいはい！」

さらにあつけにとられた。

「終音ちゃんと智ちゃんは剣士で、来ちゃんは銃士ガンマンやでー。」

いつの間にか夕暮が隣にいた。

「去年、クラスが一緒だつたんだよ」

「あ、仁さん！そなんですか」

「まあ、よう考えればあのチームが一番強いって言われとんな...」

！」

最強のチーム…か。

今日会つたのがその3人とは、驚くしかない。

「みんな注目の3年連続チャンピオンの登場よおつ……」

一夜たつて、昨日会った3人の初戦が始まった。

おれに勝て

「は…速こ…」

「終焉の舞の作戦、みたいやで。」

夕暮さんが横から顔を覗かせた。

「あ、あの…、色素欠乏症だから紫外線に弱いって事ですか？」

「それが誰一の欠點と言つていい!」

仁さんが下を向く。

「準備、しまじょうか」

? 花が無理に笑う。

次ですよ...?」

「...このまま...一歩は止まぬ」

「ああ。」

2人には、全く叶わないな。と思いつ俺は重い腰を上げた。



「やあやあやあ、ひ、ひひつ」  
「絶くん、驚いたやないの！」  
「ふふ、ふ！ や、やだね、水谷！」  
「いやあ、相変わらず… やねえ…」  
不気味な笑みを浮かべる、そのチームのリーダーらしき人物。  
… チームも不気味なんだけど。

「第5回戦の会場はっ！ なんと体育館っ！！  
チームはお分かりの通り！！  
ではでは、Ready fight！！」  
コングの音が高らかに鳴り響く。

「最初に行かせてもらいます！ 原罪！」  
『はいいいいい』  
刀を下げる…  
…  
が。  
「ふえ」  
何かにぶつかり、歩みを止める。  
あ、奇声も上げたけど。

体育館の床から手が出ている。

「原罪！」 私は、刀を本抜いて原罪に向かつて投げた。

『はいなああああ』

原罪が刀で手を斬る。

「…あ

ヤバい、これは不離だ。

体育館の床がめくれ、私目掛けて、倒れてきた。

「だあいじょうぶかあい？？ちゃん！」

「一端立て直すぞ」

慌てて原罪の力で、自らの回りを囲んだ。

「…すいません、2人とも…」

「あいつらも、潜在能力を使つてたな…。1人か？」

『いいやああ。2人だよおお！』

原罪の話を聞きながら落ちついて、呼吸を整えた。

「原罪はん、能力名と効果は？」

『多分んん、1つはあああ【死者の手】アンデッドハンド』

効果はあああ、どこからでもおおお、手をだせるううう』

最初に私がくらつたあの技だ。

『2つ目はあああ、【跪器具】セニユツだと思つうう！』

全てのモノをおおお、自分の下僕として扱えるううう…』

「厄介やんなあ…。流石は、不幸のチームやねえ。」

「ああ…。」

夕暮さんと仁さんがあため息をつく。

「あ、あの私がおどりになります！」

「「だめ」」

「うつ！なんですか！？」

夕暮さんはテ「ピンまでしていく。

「でも、これが一番いいはずです！！確実に能力者を一人ずつしと  
めれる……」

「でも……」

「やらせて下せ……！」

私は、息をのんだ。

仕方ない、と言つよつて「さんは立ちあがつた。  
「今回だけだからな」

原罪の作った、仮想空間からみんな出た。

「【傲慢】。」

【<sup>プライド</sup>傲慢】に私は適応し始める。

髪は金髪で、縦ロールに。手には扇子。

「さあ、ここからが本番ですよー！」

【<sup>プライド</sup>傲慢】は天高く扇子を上げた。



「不離、無声い、いつも通り、やうお」

「絶愛尾不離」と言うチーム内唯一の女の子が、リーダーの名を呼ぶ。

「らしくないね。」

ふう、と一息不離は吐く。

「不離、何、て？」

「らしくない。絶、何かされた？」

不離が絶に近寄る。

「止め。落ち着き。」

僕が声をかける。

「『卑怯でも、勝つ。弱くても逃げない』誓った。目標。」

「クククと僕は頷きながら言つ。

「失念、してた、ああ、勝とう」

絶が咳き、手を地面に着けた。「【跪器具】」

ボールが人形になり、従順な奴隸へと化し、相手へと向かっていく。

「【死者の手】」  
アンデットハンド

僕も、絶に続いて能力を発動した。

「ひれ伏しなさい！！」

【傲慢】<sup>プライド</sup>は、そう言いながら扇子で人形を切り刻む。人形はボールへと変わり、そして粉々になっていく。

私の足元に【死者の手】<sup>アンデットハンド</sup>が現れ、足を掴む。…のを、直前で回避。

「うつ」

相手の1人が夕暮さんの狙撃で倒れこむ。その間に、私は何発か風を撃ちこんだ。

すると、頭に鈍痛が。

【死者の手】<sup>アンデットハンド</sup>が、バットをもって私の頭を殴っていた。

扇子でその手を切り刻み、頭に手を添える。思ったより血が出ている…。

「…このままじゃ…ダメ…ですね…。」

『え！？あああああ！？』

【傲慢】<sup>プライド</sup>さん、ありがとうございました。

『え、ちょっと…、やめときなさいよ』

「出てきたださい…」、【強欲】<sup>グリード</sup>さん…！…

「？ちゃん…！…！」

夕暮さんの声が遠のいていく。ここからは能力任せ、だ

私の中で、第2の問題児。

でも、仕方ない。  
彼は1番この戦いに向いている……！……！

【強欲】<sup>グリード</sup>になつても、私の姿は何も変わらない。  
ただし…！」

「ああ、その能力！容姿！才能！人望！家柄！  
全て欲しい！！なにもかもなあ！！！」

強欲になる以外は。

「俺の本にある258個の能力よりも便利だ！！」  
ハハハハ、と悪人のような笑いを【強欲】<sup>グリード</sup>は浮かべる。  
「援護してくれよ、夕暮ちゃん」

「あ？ はあ…」

ニヤ、と少し笑つて【強欲】は本を片手に持ち、走りだした。

【死者の手】<sup>ハタケノミツ</sup>の攻撃をすり抜け、術者を1発で沈めた。  
「5678個の内の1つ！ 【無視回避】<sup>スロー・スル</sup>！」

絶くんは、仲間が倒れたと言うのに、何も気にせず戦う。  
そして、回り込んだ仁さんとの一騎打ちとなつた。  
悲しくないのか  
別に  
苦しくないのか  
全然  
寂しくないのか  
思わぬ、い！！！」

ゼエ、ハア、と絶くんは息を切らせる。

仁さんは、相手を泣きそうな目で見た。

私は【七大罪】<sup>しちざい</sup>を解除した。

血を吐きながら、ボロボロになつた死野は立ちあがつた。  
俺は攻撃の手を休めた。

「まだ、だ、やれる」

「死野……」

「見、下すな、優秀者」

「……。」

優秀者なんかじゃ、俺は無いよ。

そう俺は言おうとして、でも何故かつつかかつて。止めた。

「お前ら、は、幸せ、そうな顔、して！」

「僕ら、を！不幸、にする！」

「満足、か！？」

「違う、死野。」

「違わぬ、い！」

「除外されて、

疎外されて、

暴力振るわれて！

「僕ら、は！被害者だ！」

「そう思つてゐるのはお前だけみたい、だぞ？」

「うるさい、煩い、五月蠅い、ウルサイ、うるさい……！」

「努力しろよ、少しさは変わる」

俺は柄で死野の首を思いきり叩いた。



「僕は君を可哀想とは言わないよ  
Noah様は言った。

「世界を跪かせばみんなも思わないよ」  
貴方は、嘘を、虚偽を、言つて?え?

「絶、らしくない。」

「僕らは弱くても負けても笑おつ」

「絶」

これが、仲間か。

僕の、俺の、欲し、かつた…

心頭した瞳で藍季は更に躊躇。  
もはや、藍季の面影もない。

「同士達にがんばつてもらわなきゃね。  
僕らは一つなんだから。」

フフフ、と不気味な笑いを藍季は浮かべた。

理事長室には、不気味な影が幾つか笑い声と一緒に揺れていた。

「つ、疲れました…」  
ふう、と私は一息吐いた。  
「まあ、次が決勝やからな！」  
明日なんやで！と、陽気に夕暮さんは言つ。  
「俺は休むが、二人はどうする？」  
「私は準決勝を見てきます！」  
そう一人に告げて、会場が映されるモニターへと私は向かつた

「おい、夕暮。

お前も使つているんだろう？潜在能力を」

「なんのことやら」

ケラケラと夕暮は笑う。

俺にも、少し分かつてきた。

コイツも能力者だと言つ事が。

「ああ、仁には、もうええか。」

「は？」

「？ちゃんには内緒やで。嫌われとうないからな！」

「僕の能力は【蜃氣楼】」  
ミラールージュ

幻術よりも強い催眠によつて、いろいろ誤魔化したりする能力。  
だそうだ。

「そして、僕は女の子だよ！仁！」

「...は？」

なんだと

「は？自分で違ひって！って言つてお前！？」

秘密やて

そんな会話を一人がしている時。  
同時進行で、？花は試合を見ていた。

夏目・樋・戎谷 VS 和泉・桃刀・初

場所は技術科室。

なにやら整った容姿の夏目という相手方のリーダーが、終音さんと向かい合つて話をしている。

そして、コングの音とともに、試合が始まった。

流石、準決勝。

いや、もはやこれが、決勝かと思うくらいだ。

お互に一歩も譲らない戦いとなつており、観客も思わず息を飲む。

来ちゃんど、智さんの激しい攻撃に相手もよくなつていている。  
その時、相手の夏目が一言。

「もういいか」

「え？」

予想外の結果が、私の身を貫く。

あの3人は

能力者だ。



「夕暮さん…仁さん…」

勢いよく控え室のドアが開かれる。

僕は、能力をまた使い始めた。

「あらあ、？ちゃん！どないやった？」

「その…つ、あの…」

なんやう、？ちゃんはじびりもビビリ話で話を誤魔化している。

「単刀直入に。何があった？」

仁の質問に？ちゃんが大きく息を吸う。

「決勝は、予想と違うチームとです…。  
しかも、みんな能力持ちで」

嘘やる。

あの3人は…？

約束しどつたのに…

「…ちやうひ…ちやうやん…  
なんなん…、クソッ…！…」

「え？夕暮さん！？」

久しぶりだ、こんなに怒るの。

「や、やめろ…、夕暮…！」

“パパもママもお兄ちゃんも、みんな大嫌い”

何か息詰まるたびに、母は父は兄は。みんな私を殴った。腫れたところを学校で見られると、その度にまた殴られた。いつしか、痛みを私は感じなくなつていった。そのあとは、痕を隠すしかないと思つた。

例えるなら、その能力はうつつけだった。

隠すのに。騙すのに。欺くのに。

【蜃氣樓】  
(ミリール-ジヨ)

私を隠して。欺いて！

「え？ ゆ、夕暮さ…！」

「？ ちやん、ごめんな。騙してて。」

「お前、言つた瞬間にツ…！」

「あはは、やから、ゴメンって」

「気が変わった！ 本気でアイツら叩きのめしてやるわあ…！」

迎える決勝戦は翌日！

「いよいよ…決勝つつ！」

まずは昨年王者を倒したこのチームからつー。」

「夏目・戎谷・樋チーム！…！」

「そして！対抗するは！」

「水谷・守城・錐崎チーム！…！」

「特別席及び、観客席の皆さんは、死なない程度に逃げてね  
陽気な安雲先生。どこのをつっこめばいいのか。

「ああああーReadystoFight!!」

「賑やかだよね、錆皇」

「そうだな…、“お前と二人で”ってのが癪にさわるが。」

「ほら、笑顔笑顔」

そう言つて、俺の藍季は顔を引っ張る。

「死にてえのか？あ、？」

「ジョークだつて！」

そして、思いきり手を離した。  
痛てえ。後から覚えてろ。

「所で君は。」

僕らの味方にはならないんだね。

「気味の悪い宗教団体は嫌いでね」

「残念だよ」

ふう、とアイツは息を吐いた。

そして、誰にも聞こえないような声でこう呟いた。

「味方したら助かるかもしねないのに。」

「はじめまして、アンタがリーダー？」  
「はあ？ せやけど？」

クスクスと、歪に夏田が笑う。  
はつきり言つて、頭にくるねん。コイツ。

「【蜃氣樓】……ね。  
なんて惰弱な能力なんだろ？」「ええかげんその口閉じい。」  
流石に、ね。こいつ、むかつくな。

「こいつは、全体が倒れるまで戦うのでええ。あんたらは？」「…・・惚れるね。ああ、じゃあ同じで。」「なんやねん！

惚れるねとか、こいつは殺したいぐらいやねん！

「んーっと…。  
能力は、【検索者】【暗黙の掟】【絶対主義】ですね  
【暗黙の掟】あたりが、やっぱそудだな…」「なあ、夏田は？」  
「え、あー！ 【絶対主義】です…よ？」  
「やつぱつなあ…。」「

「な、なんですか、夕暮さん…  
もしかして恋とかですかね！？」「さん

「はは、あり得るな

。シナリオ。

「開幕の狼煙や。じゃあ、がんばろうなー。」

そして、三人は散り散りになつた。

「仁さん！私たちは連携していきましょうねー。」

「あ、わかった」

夕暮は、遠距離に陣を張つて、夏田を狙つてこる。  
俺は、能力者ではないから。  
ただ戦うことしかできな…

「え！？仁さん！？」

「なんだ？？花？俺はここ…？」

「にやはははは！アンタはどうぞを突いたら壊れるのかにや？  
『『』』はかわいいけど、許されるのは一次元だけだ…」

背後に敵。

「仁さんをびっくりやつた！」

「自分で考えにやー！」

襲いかかる？花に、榧は鎌でその攻撃を封じた。

だから、俺はここ…！

『キヅケヨ、仁』

「僕らが田くらまししてやつたのをツ…  
は？」

もしかして、お前らが能力？

小さい子供のような鬼と、頭が機械におおわれている子供。  
二人が話しかけてくる。

『アイツラは強イ』

「めちゃくちゃにしよッ！」

「ああ、わかつた……！」

「これこそが潜在能力。」

俺の本当の気持ち！

「？花」

聞きなれた声と、圧倒的な気配に振り返ると、そこには知らない人が立っていた。

「心配させて、『じめん』」

誰？なんで私の方を向いてるの？

その人は、仁さんの顔だけど。だけども、

黒に所々散つた黄色の肩まである髪と、手にはめた電子機器。

それは、能力とつながる特異な特徴で…。

「嘘だ！」コイツ…！

ハッカ

【検索者】の戎谷くんが叫ぶ。

「なんで能力者なんだ…！？」

え…？

どうしたの？

「さんは、だって…」。

“仁さんらしきもの”は、すっと手を前に伸ばした。パチ、という音と同時にまさに電光石火のごとく、地面に雷いかずちが這い、一人を襲う。

受け身を取るのが遅れた戎谷くんを漬れさせる。樋さんは、鎌を利用して遠くへ飛んだ。

「ありえないにやあ！【沈黙の掟】！」ルール

【能力禁止】という文字の出たパネルが、私と仁さんの肩につく。仁さんは、能力を止められ元の姿に戻り、私の横まで後退した。

「？花…？」

「やつぱり仁さん…大丈夫でしたか？」

「ああ」

「なあに、いやついてるんだにや！？」

樋さんは、その間に大きく前進し私たちに近づいてきた。私は刀を構え、仁さんも大剣を構えた。

“仁さんらしきもの”は、すっと手を前に伸ばした。パチ、という音と同時にまさに電光石火のごとく、地面に雷いかずちが這い、一人を襲う。

受け身を取るのが遅れた戎谷くんを漬れさせる。樋さんは、鎌を利用して遠くへ飛んだ。

「ありえないにやあ！」

バチッ、と光り追撃の雷が、樋さんに向かっていく

「【沈黙の掟】ルルルっ！！」

能力を発動した樋さん。

【能力禁止】という文字の出たパネルが、私と仁さんの肩につく。仁さんは、能力を止められ元の姿に戻り、私の横まで後退した。

「？花…？」

「やつぱり仁さん！大丈夫でしたか？」

「ああ」

「なあに、いちやついてるんだにや！？」

樋さんは、その間に大きく前進し私たちに近づいてきた。

私は刀を構え、仁さんも大剣を構え、お互に呼吸を整えた。

瞬間、脳内で声が。

『おい、変われよ』

「！？」

【憤怒】<sup>ラース</sup>が怒っている

私は樋さんの鎌を、紙一重で避けた。

(なんで、無事なんですか？)

『他の奴らは封印されてるがな  
全てはお前の意思だ』

(…?)

次々と鎌が、私に襲いかかる。

私は片方の剣で阻止し、大きく後退した。

仁さんが相手といい勝負をしている。

(相手の能力は【暗黙の掟】ですよ？)

能力を使つたらどうなるか…！)

『いいから、変われ』

(…、わかりました。)

(どうなつても知らない！)

【憤怒】<sup>ラース</sup>！



真っ白な髪の色。

焼けるような赤い目。

それはまさに別人。

そして、私の思いは全て怒りのままに。

「は？ なんで能力をつかえるのか」やあ！？」  
「？ 花ア！？」

۷

ひぢや、と全身にかえり血を浴ひたのを感じる。

ニガハザリツのロボット、開拓

気付けば相手の右腕が飛び、地面に落ちてしまふ。

「り、リタイアするから、ゆ、ゆ許して！」  
すでに特徴的な「にゅ」という口癖をわすれた樋さんが泣き叫んでいた。

三  
九

助けを請うよ」、頭を垂れ泣き叫び近寄つてくる。

鎌を振り上げた榧さん。

『時計盤を上げた【貢怒】ラースが監視よう罪で殺る。』

「は…にやあ？」

脳震盪を起こした樋さんは、あっけなく倒れた。

これで2勝！！



「…フチイツ！」

一方、その頃の夕暮。

何回やっても、何回打つても銃弾が当たらない。  
やっぱり狙撃銃じゃダメなのかな？

「ナンセンスだ」

「！？」

気付けば、夏田は私の後ろに立つていて。  
手に持った竹刀程度の刀を振り下ろしていた。  
私は狙撃銃を夏目に投げ、後ろに下がる。

「（こ）れは、能力（こ）！」

少し落ち着いて、私は分析をはじめる。

【絶対主義】オレサマ。絶対主義…、意味が違うような…。  
いやいやいや、つつこんだりしとつたらダメやー

惰弱つて言われても、うしけこは能力がいるんや。  
やから！

「隙だらけだ」

ザシユ、という鈍い音。

傷口から噴き出る血。

「終わつたな」

瞬間、腹に激痛を覚える。

「隙だらけやで」

「ツ…チイーダミーか！」

ハンドガンを手にした夕暮は、容赦なく夏田に襲いかかる。何百発という弾丸の嵐を夏田は剣ではじく。

「「一」「」

(弾詰ジャムまつた！)

夕暮は、後退し距離を取る。

「なんやねん、あんたやるやん」

「ハツ…つるやいな」

出血多量によって、夏田は顔が真っ青になっている。

「でもなんやかんやいつて、甘いな、アンタ」

幻影の夕暮は消え、夏田に膝カツクンをくらわせた。

結局、優勝はしたものの相手に重傷をくらわせたことで、？花は酷く嘆いていた。

【憤怒<sup>ラス</sup>】とは、大喧嘩をしたらしく「もう使わない。」と涙目になつていつていた。

夕暮は受け身を取り損ない、すり傷が出来ていたのと、刀による切り傷が右肩に出来ており、花が泣きながら【暴食<sup>グラトニー</sup>】で治した。

俺はと云うと、なにも傷一つ出来なかつたので、能力との対話と剣術をずっと勉強していた。  
あとは、仕事とかな。

そして、今日から新学期だ。

この学校の面白いところは、学期でクラスが変わる。実力編成だつたり、学力編成だつたりするらしい。

？花も、夕暮も同じクラスだったので、ちょっと嬉しかった。あと、智とか和泉とか初ともな。

「いきなりですが、転校生が一人このクラスになります。」

おいで、と先生がいうと一人の男女が入ってくる。瞬間、？花が、ガタンと音を立てて椅子を立つた。



少しウェーブのかかった白髪。  
中性的な顔立ち。

そして、特徴的な少しピンクがかつた目。  
それはこの手で殺した、罪の記憶。

「…！ 優…つ…くん…？」

「なんだ？ 知り合いか？ 守城！」

段々と私の顔は青ざめていく。

「はじめまして。粕谷優そめやゆうです」

そして、私に優くんは耳打ちする。

『地獄から甦ってきたよ』、と。

「？ちゃん！？」

夕暮さんの声も無視し、私はただ走った。  
走つて、走つて…

「わ、つと…危な…」

「愛季さん！ 紫煙さん！？」

ぶつかつた人物は、兄と同級生のあの一人だった。

## 58刀（後書き）

新章開始記念（？）の連投です。どうも央84です。  
これからは、キャラクター各自の成長がテーマです。  
キャラと一緒に私自身も成長出来たらいいな、と思つてます。  
これからも？花たちをよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9491r/>

---

。鈍。

2011年12月20日21時48分発行